



## 多様性という豊かさ

学校長 飯山 等

昨2020年12月25日、大谷中学校2年生の理科の授業の取り組みとして、『生物多様性研究発表会』が樹心閣で行われました。私は外の会議を終えて急ぎ会場に駆けつけました。

「虫の変化の歴史」「アリの生態について」などの37のポスター発表が樹心閣の四方の壁面を飾っています。私が会場に入ったときは各発表ポスターを前にして、それぞれ質疑を交わしているところでした。心地よい高揚感が会場全体に満ちていてとてもいい感じでした。このような機会を作ってくださった理科の先生方に感謝の気持ちでしたし、それに応えた生徒の皆さんの姿勢を頼もしく嬉しく感じました。初めての取り組みということですが、ぜひとも大きく育ててほしいと思いました。こんなに豊かな時間と場を持つことができ、そしてそれをみんなで創り出していることの意味深さと豊かさを、あたりまえの日常のような場と時間にしてしまわないで、しっかりと大事に育ててほしいと切に思います。

絶滅という視点での発表が37の発表のうち10余りあったことは、そのことが若いきみたちの間近に見えている生物の世界のすがたであることに、切なさと、年を重ねてきた者として申し訳なさも感じたことでした。当日のパンフレットで確認すると、「絶滅していく動物たち」「ウミガメ絶滅の危機その理由に迫る」「生物多様性の危機と絶滅」「自然破壊と動物の在り方」など、若いきみたちの日常意識にそのことが近く感じられているのだと伝わってきました。また、多様性というテーマに触発されてのことなのでしょうか、「共存」をテーマにした発表もいくつか見られ、ゴキブリ、サメ、蚊と、さもありませんという相手にしたものでした。言うまでもなくどれも、一緒に居たくない相手です。共に存することを誰もが歓迎しない生きものです。「共存」という言葉が、けっしてこちら側にとって都合の良いものと一緒に存在するというのではなく、排除したい、駆除したい、拒否したいという負の思いとの葛藤をくぐって、その気持ちを乗り越えて成り立つものであるという思いも感じられて、ほほえましく思いました。

たまたま、「蚊と人間の関係」の発表をしたグループに聞くことができました。発表の中で、「蚊が生存し続けるためにどうすれば

よいか」という問いを立てて、「品種改良をする」と答えていました。品種改良をする?具体的にはどうするのだろうか?刺しても相手が痒さを感じないようにするのかな?それとも、一撃一瞬で多量の血を吸うようにするのかな?でも、それだと蚊が大繁殖しそうです。興味を覚えて、発表グループの人に聞いてみました。答えは「血を吸わなくても生きてゆけるようにする」でした。ウーン、確かにいっしょに平和にいることはできるだろうなあと思いつつ、それは蚊が蚊でなくなるということだなあと思いましたが、その無関係はやがて無関心になるだろうから、それは共存とは言えないのではないだろうか。何も影響を及ぼし合わない関係も共存というのだろうか。相互に益をもたらすだけの、言わば「持ちつ持たれつ」の関係だけを共存というのだろうか。と、いろいろととめどない想念がわいてきました。

その前日の12月24日に、NHKのBSプレミアムで『ヒューマニエンス40億年のたくらみ』という番組がありました。“目”がテーマで、番組のホームページを見ると、「“目”物も心も見抜くセンサー」「実は人によって、同じ景色でも違う“色”で見えている」と紹介されていました。《多型色覚》という人間に秘められた「目」の多様性が一つのテーマでした。見え方は、正常と異常としてひとつの線上に配列されるのではなく、多様性として、その一つ一つは互いに助け合って一つの種を成り立たせている。ヒトは2色型、3色型など、さまざま多様な色覚を淘汰させることなく遺伝してきており、その多様性は単一の進化列の優性劣性ということではなく、たとえば、遠くのものにくっきりと識別できる、豊かな色合いを感じ取ることができるという色覚の多様な長が互いに助け合ってヒトという集団を存続させてきた大きな力となったのです。色の見え方の違いは“個性”であり、協力し合うことで人類は生存競争を生き抜くことができたというのです。ある一つのことのできる・できないということも、互いに尊び合う個性。翌日、中学2年生の発表に触れながら、多様性の豊かさとそれゆえのしなやかな勁さを思いました。(番組のもう一つのテーマは、白目を持つことで生まれた「視線」は、ヒトが一瞬で心を通わせて、他の生物にはない集団コミュニケーションを可能にする進化の賜物だったということです。)